鬼の野球

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鬼の野球

【Ｎコード】
Ｎ２８２９Ｇ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
野球に興味を持った鬼がプロ野球チームに入って大活躍。しかしあの金満球団が彼を狙って大金を積むが。野球コメディーです。

第一章

鬼の野球

赤鬼真似得流は山の中に住んでいる。顔は真っ赤でやたらと大きく力も強い。だが意外と気は優しく人間に対しても親切だ。頭に二つ生えている角は切っているので人間と見分けがつかなくなっている。とりあえず山の中の樵ということで人間とも付き合っているのである。

その彼がふと山で猪を撃とうとやって来た猟師と二人で岩魚を川辺で焼きながら酒を飲み楽しくやっていた時だ。猟師が彼に面白いことを言ってきたのである。

「野球！？」

「そうだべ。野球だべ」

猟師は木を突き刺して焼いた岩魚を頬張りながら彼に言ってきた。

「野球。真似得流さんは知らねえだべか？」

「おらずっと山にいっから」

実は鬼だから人間のことには疎い部分も多いのだ。だから知らなかったのである。

「そんなもんがあるなんて」

「これがよ。凄く楽しいんだべさ」

猟師は少し酒を飲んでからまた真似得流に話すのだった。

「やるのも見るのも」

「へえ、そうだべか」

「ボールをな」

「ボール！？ああ、球だべか」

それが何のことかはとりあえず思い出した。山の麓の村の人達と話をしていてそのことは聞いていたのである。

「あれをどうするんだべか？」

「バットで打ってだな」

「バット！？」
「あんれまあ、本当に知らねえのかい」
猟師はここで真似得流が野球のことを全然知らないことがわかった。
「真似得流さん、あんた野球のこと知らないんだね」
「何か面白いもんだっていうのはわかるべさ」
だがそれだけなのだった。その怖い顔に困った汗をかきつつ述べる。知らないのだから何を聞かれてもわからないのである。
「けんどもそれ以上は」
「よし、じゃあおらが教えてやるべさ」
彼が本当に何も知らないのを確認して名乗り出る猟師だった。
「ええか？まんず」
「ああ」
こうして真似得流は猟師に野球の話を教えてもらった。後に本まで借りて勉強してそのうえで彼が思ったことは。極めて純粋なことだった。
「よし、おら決めただ」
意を決した顔で言うのであった。
「おら、野球をしに山を降りるだ」
「あんれまあ、真似得流さん」
「そうしたらあんた」
麓の村の人達は彼のその言葉を聞いて言うのだった。
「プロ野球選手になるだか」
「ホームラン打って」
「んだ」
プロ野球のことも本を読んでわかっていた。かなり細かい部分まで勉強したのである。
「おら、東北極楽セネタースに入るだ」
「あの弱っちいチームに！？」
「また物好きな」

「おら、そういうチームが好きだ」
これは彼の元々の好みである。弱い者をいたわる優しさもあるがそれと共にそういうチームを強くさせたいと思ったのだ。そういうことだった。
「だから。あそこに入るだ」
「極楽にだべか」
「じゃあ真似得流さん」
村人はそんな彼等の言葉と心を受けて笑みになった。そうしてまた彼に言うのであった。
「そこまで言うんなら頑張れよ」
「応援すっからな」
「皆、時々は帰って来るだ」
にこりと笑って村人達に話す。
「その時またな」
「んだ、楽しくやるべ」
「御馳走用意してっからな」
村人達もこう言って彼を送り出すのだった。まずは入団テストだったが彼はここでいきなりそこにいた者達の度肝を抜くのであった。
「うわ・・・・・・」
「これは凄いぞ」
テストを監督する極楽のコーチ達が彼のテストの結果を見てまず唖然とする。クリムゾンレッドと白のユニフォームが中々いい。金色の文字も映えている。
「この真似得流茶利って選手」
「遠投が一三〇メートルか」
「しかも打てば必ず場外」
彼等はそのデータを見ながら唖然としつつ言葉を続ける。

第二章

「足は普通位だけれどそれでも」
「身長は二メートルを超えてるしな」
鬼だから大きいのも当然だった。
「こんな逸材がいたなんて」
「しかも二十二歳か」
年齢は完全に偽っている。戸籍もあるがこれは昔に村の役場の人達が工面してくれたものでかなりいい加減だ。一応高卒ということにはなっている。村の地元の高校である。年齢も同じだ。
「まだ成長しそうだしな」
「これ、監督に言うか」
「言わないといけないだろ」
コーチ達はこう言い合う。
「やっぱりな。これだけの素質があるとな」
「そうだな。それじゃあな」
「ああ。そうしよう」
こうして彼のことは極楽の監督の耳に入ることになった。話を聞いた極楽の村野克哉監督はまずは顔を顰めさせてこう言うのだった。
「ほう、どんなデータの改竄や」
「あの、改竄じゃなくてですね」
「本当なんですけれど」
「わかっとる」
この村野という人物はいつもむすっとした顔をしていて口が悪いことで知られている。しかし彼を知る者は実はそれは表面だけで気さくなところもありはにかみ屋であるとも言う。意外と以上に優しい人柄の持ち主だという証言も多く中々面白い人物とされている。現役時代はキャッチャーでありスラッガーであった。
「わしも見てたわ」

「あっ、監督もだったんですか」
「当たり前やろが。わしは監督やぞ」
その無愛想な顔で答える。
「監督が見んでどうすんねん。この監督室におってもどうにもならんわ」
「まあそうですけれど」
「それで監督」
「採用や」
もうそれは決めているのだった。
「使うで、こいつ」
「そうですか。やっぱり」
「使いますか」
「肩もええし動きもええ」
彼はそこまで見ていたのだった。
「身体もごついしパワーもある。こいつはひょっとしたらな」
「凄いスラッガーになりますよね」
「それだけやあらへん」
しかし村野はここでこう言うのだった。
「わしや古多を超えるな」
「監督をですか？」
「というと」
「こいつはキャッチャーや」
今度はポジションまで指定するのだった。
「キャッチャーとして使うで。ええな」
「キャッチャーですか？けれどそれは」
「テスト生ではなくもっとしっかりした場所からスカウトしてでは」
「それでもなれん奴はなれんわ」
村野ははっきりとこう切り捨てた。
「キャッチャーだけはな。それでなれる奴はなれる」
「それはそうですけれど」

「それじゃあ」
「そうや。こいつは見たところいつも周りをよお見とった」
村野はそこまで見ていたのである。
「その目の細かさを買う。キャッチャーや」
「わかりました。それじゃあ」
「監督にお任せします」
「さて、たっぷりしごいたろか」
楽しそうに笑いながらの言葉であった。
「赤鬼みたいな顔しとるがな」
流石の彼も真似得流の正体が鬼とは気付いていなかった。だがそれでも彼を採用して育てることにしたのだった。彼は春季キャンプから早速その実力を発揮した。
「あのテスト生凄いよな」
「ああ、全くだ」
選手達だけでなく取材に来たマスコミ陣もファン達も声を揃えてこう言うのだった。キャンプにおいて彼はバッターボックスではどんなボールでも打ち、しかもスタンドに軽々と放り込む。投げては的確な場所に大砲の如き送球とどんなボールでも捕れるキャッチング。いきなり皆の度肝を抜いた。

第三章

「誰だったっけ、あれ」
「何でも真似得流というらしいぞ」
「真似得流！？何処の学校だ？」
「ノンプロか？」
「いや、何でもな」
ここで詳しい人間が彼について言うのだった。
「東北の田舎の方の出身でな」
「東北？じゃあ地元か」
「極楽も逸材を見つけていたんだな」
「それがどうにもな」
少し声のトーンが下がってひそひそとした話になる。
「あいつ素人だったらしいぞ」
「素人！？」
「嘘だろう？」
皆そう言われても信じなかった。そもそもプロでありしかも練習風景だけ見てもとてもそうとは思えなかったからだ。だがその詳しい人間は言うのだった。
「地元の高校には野球部自体がなくてな」
「じゃあ本当に野球は」
「ああ、テストを受けるまではボールも握ったことがないらしいぞ」
「それであれか！？」
「あれだけできるのか」
皆その話を聞いて首を捻るばかりであった。
「嘘みたいな話だな」
「身体能力がそれだけずば抜けているってことか」
「そういうことだな」
こう結論付けられるのだった。

「けれどそれでもあいつはな」
「ああ、凄いな」
「見ろよ、監督」
彼等は今度は村野を見る。見れば彼はマスクを被る真似得流のところに来て色々と教えている。真似得流のことを最もよくwかあっているのは彼らしかった。
「ええか、真似得流」
村野はよく監督室に彼を呼んで話をするのだった。ソファーに向かい合って座り色々なファイルを見せながら彼に話すのであった。
「野球はな。身体でするもんやないんや」
「身体ではしないんだべか」
「そうや。それもあるがやっぱりここや」
こう言って自分の頭を右の人差し指でこんこんと叩いてみせる野村であった。
「ここでするもんや」
「頭でですか」
「そや。御前は身体はほんま立派なもんや」
それはもう誰もが認めるところだった。村野にしろそれを見て彼の採用を決めたからだ。だからそれはもう言うまでもないことであった。
「けれどや。そこにプラスアルファしてや」
「頭も」
「御前はキャッチャーや」
次に彼は真似得流のポジションについて話した。
「相手のピッチャーやバッターをまず見る」
「見る・・・・・・」
「そのデータをしっかりと取っていくんや。どんな球を投げてどんな球が好きか」
己の現役時代を思い出しながら話すのであった。
「そういうことをな。とことん調べていくんや。そうしたら御前は

最高の野球選手になれるで」
「おらが最高の野球選手に」
「そや、なりたいやろ」
真似得流の目を見て問うてみせた。
「最高の野球選手に。どや？」
「なりたいです」
やはり答えはこれだった。これしかなかった。
「絶対。おら最高の野球選手になるだべ」
「よっしゃ。そやったら教えたろ」
村野は会心の笑みを浮かべて真似得流に応えた。こうして彼は連日連夜野球漬けとなった。だが彼は素直な性格から飲み込みが早くオープン戦では早速。
打ち守る。リードも見事なもので盗塁はまず確実に刺す。それを見て記者達もファン達も度肝を抜かれた。早速あちこちで彼のことが議論になった。
「何だよ、あの真似得流っていうの」
「凄いよな、全く」
「凄いなんてものじゃないぞ」
こう言い合うのだった。
「あのバッティングな」
「もうホームラン何本打った？」
「五試合で三本だよ。ヒットだってな」
「ここぞって時に打つよな」
「そうそう」
その勝負強さもまた話題になっていたのだった。

第四章

しかも。彼はそれだけではなかった。
「送球いいよな」
「座ったまま投げてセカンドやショートのグローブにそのままだからな」
「あんな送球梨田以来だろ」
かつての近鉄のキャッチャーである。彼は座ったまま、両膝をついて投げそれで相手ランナーを刺していた。抜群の強肩だったのだ。
「あれは凄いよ」
「ブロックもな」
「相手弾き飛ばすしな」
「身体はやっぱり頑丈みたいだな」
それはその体格から皆察していることだったので特に驚かなかった。
それに加えて。彼等が驚いていることがまだあった。
「凄い勉強家らしいぞ」
「そんなにか」
「ああ。ムラさんのデータを毎日時間があれば貪るようにして読んでるらしい」
「へえ、そうなのか」
「だからあのリードか」
「新人には全然思えないリードだと思ったがな」
ムラさんとは村野の仇名の一つである。
「道理でな」
「ムラさんもあいつを随分と買ってるみたいだな」
「そうだな。それにしても」
彼等は言うのだった。
「あいつ、凄いぜ」

「ああ。こりゃ凄い人材だぜ」
「まさに逸材だな」
そう言うしかなかった。
「ペナントがはじまったらどうなるかな」
「見ものだな」
皆わくわくしながら彼の活躍を待っていた。そうしてそのペナントがはじまると。最初から最後まで大活躍の彼であった。
打率三割七分、ホームラン五十本。打点一一四。そのうえ守っては盗塁阻止率は六割に達しパスボールはなし、しかもチームの防御率や失点は彼の加入により段違いに減った。全ては彼の力だった。
そんな彼が四番に座り打ちマスクを被って守りグラウンドの指揮官となる。これで勝てない筈がない。極楽は優勝したのだった。日本シリーズでも優勝した。彼は三冠王だけでなく新人王とペナント、シリーズ両方のＭＶＰに輝いたのだ。見事な大活躍であった。
それが一年目でしかもそれに終わらなかった。二年目三年目もその活躍は続き極楽は黄金時代を迎えた。まさに彼の力によるものだった。
「ええ人材を手に入れたわ」
村野は真似得流が入って三年目で勇退した。日本一の胴上げの後で花束を手にこう言うのだった。
「あいつがおったおかげでチームは変わった」
「そうですよね、やっぱり」
「真似得流のおかげで」
「わしの現役の頃には及ばんがな」
ここで少し憎まれ口を叩くのが村野らしかった。
「けれどまあ。あいつが入って皆段違いに練習するようになったし」
「そんなにですか」
「あいつは真面目や」
それはもう評判になっていた。いつも練習とデータの収集と分析、検証、それにアフターケアに時間を費やし酒も遊びもしない彼を見

てチームメイトも変わった。練習をし野球をすればそれだけ強くなれる。その効果で極楽というチーム自体が強くなったのである。
「それがええんや」
「真面目なのは確かですね」
「それは」
会見を報道する記者達もそれは認めた。まさに彼を評してこう言うのだった。
「鬼ですよね」
「そう、野球の鬼」
「まさにそうですよね」
「赤鬼やな」
村野はここで笑いながら言った。
「赤鬼や、あいつは」
「確かに。顔がいつも真っ赤ですし」
「そのうえ大きくて力も強い」
そういうのを見ての仇名であった。
「赤鬼真似得流ですか」
「これはいい」
「その赤鬼がチームをここまでしてくれた」
村野はまた真似得流を褒めた。
「あいつを置き土産にして。ユニフォームを脱げるのは最高の幸せや」
村野はこう言い残してチームを去った。極楽は彼が去った後も真似得流を中心として常勝街道を進んでいた。だがやがて。あることが囁かれるようになってきた。

第五章

「やっぱり虚陣か？」
「ああ、あいつ等がな」
皆顔を顰めて囁き合うのだった。
「あいつ等が狙ってるらしいな」
「スラッガーだからか」
「それだからだよ」
そのスラッガーというところで頷くのだった。
「連中はよそのチームからスラッガーとエースを掠め取るのがいつもだろ」
「札束積んでな」
嫌悪感丸出しで言い合うのだった。
「金で転ばない人間はいないって考えてるからな、あそこのフロントは」
「よくそれで社会の木鐸なんて言えるな」
「マスコミは権力者だぜ」
まさにその通りの言葉が述べられた。
「何をしたって許されるだろ？」
「あの新聞は特にそうだな」
「マスコミがバックにいると強いよ」
「まさに何でもできる」
「あそこの会長なんかそのまんまだろ」
話彼等の顔に浮かぶ嫌悪感がさらに強くなっていく。
「あいつと北の将軍様どう違うんだ？」
「いや、同じだ」
「そうさ。同じさ」
これが一つの結論になった。
「だからだよ。連中は真似得流もな」

「狙ってるんだな」
「それで最近逃し続けてる優勝をってつもりらしい」
「そう言って毎年他所のチームから選手掠め取ってるじゃないか」
「そうだそうだ」
日本国民から常に言われていることである。
「それで優勝できてないじゃないか」
「あの会長のせいでな」
「それでも狙ってるそうだ」
だがそれでもだったのだ。最早他人の意見なぞ全く耳に入らず札束をばら撒き続ける。そうした腐敗に浸りきってしまっているのだった。
「あいつをな」
「若し虚陣に行ったら終わりだな」
「全くだよ」
皆ここで顔を露骨に変えてきた。
「そうなったら俺ファンやめる」
「俺もだ」
「あの球団に行ったらそれまでの奴ってことだよな」
「そうだな」
こう言い合うのであった。
「絶対に行かないで欲しいけれどな」
「けれど。目をつけてるのは事実か」
選手の育成も外国人選手の調査も下手で得意なことといえば札束だけの球団に皆嫌悪感を感じているのだ。そんなチームには行かないで欲しいというのが日本国民の多くの考えだった。そしてそのことは他ならぬ真似得流の耳にも入るのだった。
「何か最近おかしいんだべさ」
「ああ、聞いてるべか、あんたも」
「んだ」
そのシーズンは惜しいことに二位だった。それに無念さを感じた

彼は故郷で山篭りをして己を鍛えなおしていた。野球選手になるまで暮らしていたその小屋であの猟師と夕食を採りつつ話をしているのだった。食べているのは牡丹鍋だ。猟師がこの山で捕まえた猪だ。
それを食べつつ酒を酌み交わしながら話をしている。少し薄暗い小屋で鍋を煮る火を暖房にしながら話を進めるのであった。
「おらが虚陣か」
「向こうは狙ってるべさ、あんたを」
「おらを欲しいんだべか」
「もっとはっきり言えばあんたの実力と人気が欲しいんだべ」
「人気！？」
真似得流は人気と聞いて眉を上げた。何でまた、といった表情になりながら。
「あの球団は人気あるべ！？なしてそれで」
「今までのやりたい放題が祟ってそれはもう昔になってるだ」
猟師は杯の酒を飲みつつ彼に述べた。
「そのせいで。今では落ちぶれてるだ」
「それは聞いてっけど」
「で、あんたが欲しいっていうわけか」
「おらを。欲しい」
「そういうこった。それであんたはどうするんだべさ？」
「おら！？」
「そう、あんただ」
真似得流に対して告げた。

第六章

「あんたは。どうしたいんだ？虚陣に行きたいべか？」
「東京だよな」
真似得流は猟師の問いに答えずにこう尋ね返してきた。
「あのチームがあるのは」
「んだ。東京だべさ」
「東京か」
東京と聞いて考える顔になるのだった。
「おら、あそこは好きじゃないだ」
「好きじゃないべか？」
「んだ。落ち着かないだ」
浮かない顔でこう述べるのだった。
「ごちゃごちゃして。人も冷たいし」
「それはよく言われるこったな」
「好きじゃないし。それに」
「それに？」
「やっぱり東北が一番べさ」
猪の肉を頬張りつつ猟師に答えるのだった。
「おらにとっちゃ。ここが一番いいべさ」
「けんど。金弾むのは間違いないべ」
猟師は今度はこのことを彼に話した。
「金は。凄いべ」
「それはわかってるだ、おらも」
それについては真似得流も聞いていた。そのうえでまた言うのだった。
「極楽なんか比べ物にならない位だべ？」
「んだ。マスコミはやっぱり金持ってるだ」
「おら金はどうでもいいだ」

真似得流はここで金は拒んだ。
「ただ野球がしたい。それだけだ」
「じゃあ虚陣には行かないだべか？」
「あのチームは大嫌いだ」
今ここではっきりと言い切ったのだった。その言葉に偽りはなかった。
「だからおら。極楽に残るだ」
「それはもう決めてるだか？」
「変えるつもりはないだ。全く」
「そか。じゃあそれを会見で言うだべな」
「そのつもりだべ。けんども」
「けんども？」
「おら、どうしても腹の立つ奴がいるだ」
ここで彼は顔を顰めさせて猟師に言ってきた。今度は葱を食べている。その葱でまた一杯やりながら猟師に対して言うのであった。
「あいつだけは黙らせたいだ」
「誰だ？それは」
「米輔だ」
自称野球通の落ちこぼれ落語家だ。下品で卑しい顔と性根を持っておりその虚陣の太鼓持ちとして日本国民の前にその下劣な姿を晒し気付くことのない愚劣な輩である。以前ある騒動で相手を馬鹿にした顔を見せ国民の総攻撃を受けたことがある。何の芸もないというのにしゃもじを持って他人の飯を漁ることで生きている。人間というものはここまで卑しいものになれるということの生き証人でもある。人類の恥である。
「あいつはいつも虚陣の太鼓持ちばかりしておらに極楽を捨てて虚陣に入れと喚いてるだ」
「あれは馬鹿だべ」
猟師もこう言って切り捨てる。
「相手にすることはないだ」

「わかってるけんども腹が立って仕方がないだ」
真似得流のこの感情は義憤であった。
「あいつだけは許せないだ」
「けんども暴力振るうわけにはいかないべ？」
「考えはあるだ」
彼はこう答えたのだった。
「そこんとこは任せて欲しいだ」
「何か考えがあるべか」
「んだ」
また猟師に対して答えた。
「任せてくんな。面白いことしてやんだ」
「わかった。じゃあ楽しみにしとくべな」
こう言葉を交えさせながら酒と猪を楽しんだオフの山篭りの一日だった。そしてその次のペナント。極楽は彼のこれまでにない活躍で日本シリーズを制した。相手は奇しくも虚陣であったが見事に初戦から四連勝を収め格の差というものを見せ付けたのだった。
日本一になり胴上げが行われた。その時に彼も胴上げされた。そしてそれが終わってから彼ははっきりと宣言したのであった。球場において。
「おら、極楽にずっといるだ」
「極楽ですか」
「では虚陣には」
「何があっても行かないだ」
グラウンドでマイクを受けてはっきりと宣言したのであった。
「絶対に。何があっても」
「行かれないんですか」
「極楽だ」
また言うのであった。
「極楽以外には行かないだ」
「そうですか。ではフリーエージェントは」

「行使しないだ」
言葉は変わらなかった。
「そしてまた来年も虚陣が出て来たら倒してやるだ」
それを聞いて観客もテレビの視聴者達も大騒ぎになった。ネットにおいては早速祭りになる。それだけの衝撃の発言であったのだ。
「今それを皆さんに誓うだ」
「わかりました。それでは」
「また来年も」
「んだ。日本一になるだ」
宣言は続く。
「極楽で」
これで全ては決まった。彼は極楽に残留した。日本国民はこのことに喜ぶばかりだった。何しろ彼は金に転ばずに心を取ったからだ。
しかし。それを快く思わない輩もいた。その米輔である。
「虚陣を断るなんて何様なんだ」
いきなり己のブログに書きだした。
「たかが選手が。何を考えているんだ」
早速これは話題になりこの男のブログは批判の書き込みであふれ返った。忽ちのうちにとある巨大掲示板群の野球関係で話題になり集中砲火を浴びた。出ている番組にも抗議の電話やメール、ファックスが殺到し遂には番組をおろされテレビに出られなくなってしまったのだった。
「いい気味だ」
「自業自得だ」
まさにそうであった。だがそれで懲りたり反省したりするような品性のいい人間の筈がなくまだブログ等で悪態をつくのだった。しかし当の真似得流はそんな男のことなぞ歯牙にもかけていなかった。まさに論語で言う君子と小人の如き差がそこにはあった。

第七章

「おら、野球やるだけだ」
こう答えて黙々と走り素振りをして相手チームのことを勉強していく。その姿勢は相変わらずだった。そしてそのキャンプにおいて彼は評論家となっている村野と対談の時を持ったのだった。
その場において村野は。まず彼に対して言った。
「相変わらず野球の虫やな」
「はい」
真似得流は彼のその言葉に頷いて応えた。
「おら、やっぱり野球が好きだ」
「そうか」
「極楽で野球をやっていきたいだ。ずっと」
「メジャーとかは興味ないんやな」
「そんなもん全くないだ」
こうも答えた。
「ただ。野球がしたいだけだから。アメリカじゃなくても野球はできるだ」
「だから虚陣には行かへんかったんか」
「あそこじゃいい野球はできないだ」
はっきりと言い切ったのであった。
「だから。おら極楽でやりたいだ」
「野球ができるからやな」
「んだ」
また答えた。
「その通りだ。おら野球がしたいだけだから」
「その意気や」
そして村野は真似得流のその言葉を聞いて笑顔で頷くのだった。
その言葉にこそ彼の心が何処にあるか見ての頷きであった。

「その意気やからこそ今の御前があるんや」
「今のおらがか」
「そや。御前は鬼や」
彼は言った。
「野球の鬼や。見事やで」
「鬼でいいんだか？」
「ええんや」
微笑んで彼に告げるのであった。
「御前も知ってるやろ。闘将って言われた」
「西本幸雄さんだべな」
「その方もまた野球の鬼やった」
実は村野が尊敬する野球人である。この素直でない男が素直に褒める数少ない人物である。だがそうさせるものがこの西本という人間にはあるのだ。
「今もな。立派な方や」
「んだな。ああいう方になりたいだ」
「そう思うことこそがええんや」
村野はまた真似得流に話した。
「その心こそがな。ええんや」
「野球の鬼だか」
「鬼になるのは悪いことやない」
なお村野は彼が本当に鬼であることは知らない。彼は話を聞いていて内心鬼でもいいのかと思ってもいたがそれもいいというのだ。彼にとっては有り難いを通り越して信じられない言葉であった。
「むしろな。ええことなんや」
「ええことだか」
「鬼は強い」
だから鬼である。昔はそう決められていたしそれは今も非常に根強く残っている。日本人特有の考えの一つでもあるのである。
「そしてそこに人の心が備わってれば」

「何になるだ？」
「それで本当の鬼になるんや」
こう彼に話す村野であった。
「それでこそな。本物の鬼や」
「心を知ってこそだか」
「そうや」
今の真似得流の言葉に対して頷く。
「その通りや。そうした意味で御前は本当の鬼になったんや」
「おらが。本当の鬼に」
「仇名通りになるのには結構な時間がかかったりするもんや」
村野独特の話の流れになってきていた。
「御前が最初に入った年やったかな」
「あの時だか」
「言うたな。本物のキャッチャーになるのには十年かかるてな」
「確か」
村野もその時のことを思い出して頷く。
「最初のキャンプだったべな。監督、いえ村野さんがおらに言ったのは」
「そや、その十年が経った」
彼は言う。
「御前は本物のキャッチャーになった。けれどそれだけやあらへん」
「本物の鬼になっただか」
「そや。見事な」
真似得流の顔を見て微笑んでの言葉だった。意外にもそういう顔もまた実によく似合うのがこの村野という男の特徴なのである。
「なっとるで。後はこのまま本物のキャッチャーの道と」
「本物の鬼の道をだな」
「進むんや。ええな」
「わかっただ」
村野のその言葉に頷いた。

「おら、もっと本物の鬼になるだ。これから」
「そや。その意気や」
こうして対談は円満のうちに終わった。そしてキャンプが終わってその因縁ある虚陣とのオープン戦。がらがらで誰もいない虚陣側の外野席にあの男がいた。
「けっ」
米輔であった。すっかり干されてやさぐれ今日もビール片手に赤い顔をしていた。叩かれ干されたおかげですっかりやさぐれてしまい家族とも別居してしまっているのだ。まさに自業自得の無様な状況である。
だがやはり反省する筈もなく。今もこうして無様な姿を公の場に晒している。そんな彼を見て良識ある者達は皆顔を顰めさせていた。
「お母さん、あの変なおじちゃん誰？」
「しっ、見ちゃいけません」
ある母親がこう言って米輔を子供に見せまいとする。そしてその時にこの母親が言った言葉がこれまた絶品なのであった。
「あんな大人になってはいけませんよ」
「うん、僕わかったよ」
子供も母親のその言葉に頷くのだった。確かにみすぼらしい格好で顔も洗わず髭も剃らず赤い顔をしているこの男は反面教師と呼ぶに相応しい有様だった。もっともその知性や品性や人格の元々の卑しさを考えれば外見がそれについてきたと言うべきであろうか。

第八章

「あんな人間には絶対にならないよ」
「そうしなさい」
「おい、米輔じゃねえか」
「来るなよな、野球に」
「全くだ」
不良風の兄ちゃん達もこの男を見て顔を顰めさせていた。
「野球ファンの恥だよ」
「後で入り口に塩撒いておこうぜ」
「ああ、そうしよう」
こんなことまで言っている。とかく無様に落ちぶれ誰からも相手にされなくなってしまっているのだった。実にこの男にとって相応しい状況だ。
「ったくよお」
そのすっかり落ちぶれ果てた米輔がビールを飲んだくれながら悪態をつく。
「何で俺がこんな目に遭わなくちゃいけないんだよ。全部あいつのせいだ」
やはり自分が悪いとは思っていない。そしてここでウグイス嬢の声が球場に響く。
「四番キャッチャー真似得流」
「三振しろ、三振」
真似得流の名を聞いて早速野次を飛ばす。
「ずっと東北の片田舎で埋もれてろってんだ」
「聞こえてるな」
「はい」
監督がバッターボックスに向かう真似得流に声をかけつつレフトスタンドを見ていた。そこに米輔がいるのはもう彼等もわかってい

るのだ。
「けれどだ」
「わかってるだ。おら全然気にしていないだ」
「それでいい。じゃあオープン戦だけれどな」
「打っていくだ」
こう監督に答えてバッターボックスに向かう。バッターボックスに入るとそれだけで球場を大歓声が包み込む。彼の人気を反映してのことだ。
応援歌が流れ打て打てと叫ばれる。真似得流はその中で構える。今度は相手チームもキャッチャーが冗談めかした調子で彼に声をかけてきた。
「お手柔らかにとはいきませんよね」
「おら打つだよ」
こうそのキャッチャーに返す真似得流だった。何事にも一切手を抜かないのが彼である。
「だから。今も」
「そうですか。それじゃあ」
「来るだ」
今度は相手のピッチャーに対して言ったのである。
「おら、今年も頑張るべ」
「それはこっちも同じですよ」
相手チームのキャッチャーの声が紳士的かつ真面目なものに変わった。
「それが野球ですしね」
「んだ。おら鬼だ」
真似得流自身の言葉である。
「野球の鬼だ。だから今年もやるだ」
こう言って相手のボールを待つ。そして。
バットを一閃させる。すると弾丸ライナーが飛んだ。それはレフトスタンドに一直線に突き刺さった。かに思われたのであったが。

「なっ！？」
「おい、マジかよ」
何とそのボールが相変わらず飲んだくれて野次を飛ばしていた米輔の頭を直撃したのだ。米輔はそれを受けてもんどりうって転倒しそのまま気を失った。
しかも。この男は。
「おいおい、さらに信じられねえよ」
「失禁してるぜこいつ」
鼻血を出して倒れつつ失禁してしまっていた。ズボンの前が情なく濡れている。
「しかもよ、この匂い」
「うわ、まさか」
「いや、間違いねえよ」
異変はそれだけではなかったのであった。何と。
「うんこ漏らしてるぜこいつ」
「くっせえなあ、おい」
「ここまでゴミだったなんてな」
皆彼を晒いながら携帯で撮っていく。完全に晒し者だった。
「これあそこの掲示板に貼るか」
「ああ、それいいな」
「貼ろうぜ、これ」
この無様な姿がネットに流布することにもなったのだった。その時真似得流は満面の笑顔でダイアモンドを回っていた。まさに天国と地獄であった。
翌日。ネットだけでなくスポーツ新聞の一面でも米輔の無様な姿が晒されることとなった。その真似得流のボールを受け失禁し倒れているその姿が。彼は瞬く間に日本一の恥晒しとなったのであった。
「惨めなもんやのう」
村野はその新聞を読みつつ呟いていた。
「芸人もこうなったら終わりや」

「終わりですか」
「そや、完全に終わりや」
こう一緒にいるスポーツライターに対し言うのであった。丁度二人は喫茶店でモーニングを食べている。トーストにゆで卵、それにコーヒーという組み合わせである。

第九章

「人間としてもな。失禁したのは小さい方だけやないしな」
「その場はかなり臭かったそうですよ」
「当然やな。うんこは臭いからうんこや」
「そうですね。それは」
「糞には糞蝿がたかる」
村野はこうも言った。
「そして花には蝶が集まるんや」
「花にはですか」
「虚陣にはこういう糞蝿しかおらん」
言うまでもなく米輔のことである。最早この男は日本中の笑い者となってしまった。
「けれどや。極楽には真似得流や」
「それが花ですか」
「と言いたいところやが違うな」
しかしここで言い換える村野だった。
「それはな。ちゃうわ」
「違いますか」
「鬼や、やっぱり」
彼が出した言葉はこれであった。
「あいつは鬼やな、やっぱり」
「野球の鬼ですね」
「ほんまに鬼ちゃうかって思った時もあった」
苦笑いと共の言葉だった。しかし実はその通りであったということはさしもの村野も気付かなかった。流石に鬼が野球をしているとはお釈迦様ではない彼もわからないことだったのだ。
「けれど。まさにあいつは」
「野球の鬼ですね」

「鬼ちゅうのはな。純粋にそれを突き詰めて極められる奴のことを言うんやろな」
考えながら述べる村野であった。
「それこそがまさにあいつちゅうわけや」
「成程、そういうことですか」
「そういうこっちゃ。それを考えたらあいつはやっぱり鬼やろ」
「確かに」
ライターも彼の今の言葉に頷いた。
「その通りですね。だから赤鬼ですか」
「仇名の通りや」
やはり彼が本当に赤鬼だとは思ってもいない。
「ホンマにな」
「さて、それで村野さん」
「ああ」
今度は彼がライターの言葉に応える。
「これ食べたら極楽の取材ですけれど」
「あいつの顔を見に行くんやな」
「この話します？」
「こんなカスのことなんかどうでもええわ」
一面でその無様で惨めな姿を晒す米輔をこの上ない侮蔑の目で見下ろしつつ述べる。それはライターにしろ同じことであった。
「たかが選手とほざいた奴が今やうんこ漏らしや」
「確かに」
「うんこはうんこでしかあらへん」
こうまで言う。
「けれどあいつはちゃう。鬼や」
「鬼が果たして何処まで極められるかですね」
「そうや。その前にうんこなんか何の存在理由もあらへん」
また言うのだった。
「けれどな。鬼は」

「違いますね。それじゃあ」
「こんなことはどうでもええんや」
最後にこう言って新聞を側にあったゴミ箱の中に放り込んでしまった。
「それよりもや。やっぱり」
「取材ですね」
「そういうこっちゃ。鬼や」
もうその鬼が誰なのか言うまでもなかった。
「観に行こか。さて、どんなヘマしよるかな」
「ヘマって村野さん」
「あいつはあれでおっちょこちょいなんや」
苦笑いするライターにいつもの村野節を見せていた。そのうえでの言葉だった。
「それを書いたらええ。そういうこっちゃ」
「そうなんですか」
「言うやろ。鬼の目にも涙ってな」
「それは違うんじゃ？」
ライターもライターで村野に合わせて突っ込みを入れる。
「何か別ですよ」
「おっと、そうやったか。まあええ」
だが村野はそれでも別に構わなかった。とりあえず言ってみただけの言葉であったからだ。
「何はともあれ。鬼へのインタビューやな」
「はい、行きましょう」
二人はモーニングを手早く済ませ喫茶店を後にした。米輔の醜態が晒されている新聞の横に丁寧に置かれている別の新聞紙ではその赤鬼が満面の笑みでダイアモンドを回っている写真が一面にあった。鬼は笑顔で野球を楽しんでいるのがわかる写真であった。

鬼の野球　完

1

2008・12・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2829g/

鬼の野球

2010年10月8日15時50分発行